

## モエンジョ・ダロ遺跡収集資料等の寄贈について

著者	下間 頼一
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	39
ページ	10-11
発行年	1999-09-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00024109">http://hdl.handle.net/10112/00024109</a>

# モエンジョ・ダロ遺跡収集資料等の寄贈について

下 間 頼 一（関西大学名誉教授）

このたび御縁あって、モエンジョ・ダロ遺跡収集資料等5種9点を関西大学博物館へ寄贈させて頂くことになった。昭和52年12月27日～52年1月8日 パキスタン・アフガニスタン訪問の機に恵まれた。パキスタンではガンダーラ・ペシャーワル・カラチおよびインダス文明の著名な遺跡であるモエンジョ・ダロ遺跡（死者の丘の意）を訪ねた。寄贈資料はいずれも現地で蒐集したものである。

紀元前2500年頃よりインダス河流域に栄えたインダス文明は都市文明の性格が強い。後のインド文明の源流の一つとも理解される文化要素が存在し\*、また海路による交易によってメソポタミア文明とも繋りをもつ。街路整然たるモエンジョ・ダロ遺跡を訪ね、悠久の往古の都市跡に立って感銘深いものがあった。インダス文明の衰退については、人為的な要因や自然環境の変化にその原因を求める見解が多く提出されているが、研究者間で衰退要因についての一致はまだまだみていない。

今回寄贈する資料の内訳は、有銘印章1点、コブウシ形土偶1点、人物土偶1点、土器片1点、インダス印章シーリングの複製5点の、計

9点である。インダス印章シーリングの複製品をカラチ国立博物館にて購入した以外は、いずれもモエンジョ・ダロ遺跡において収集・購入したものである。

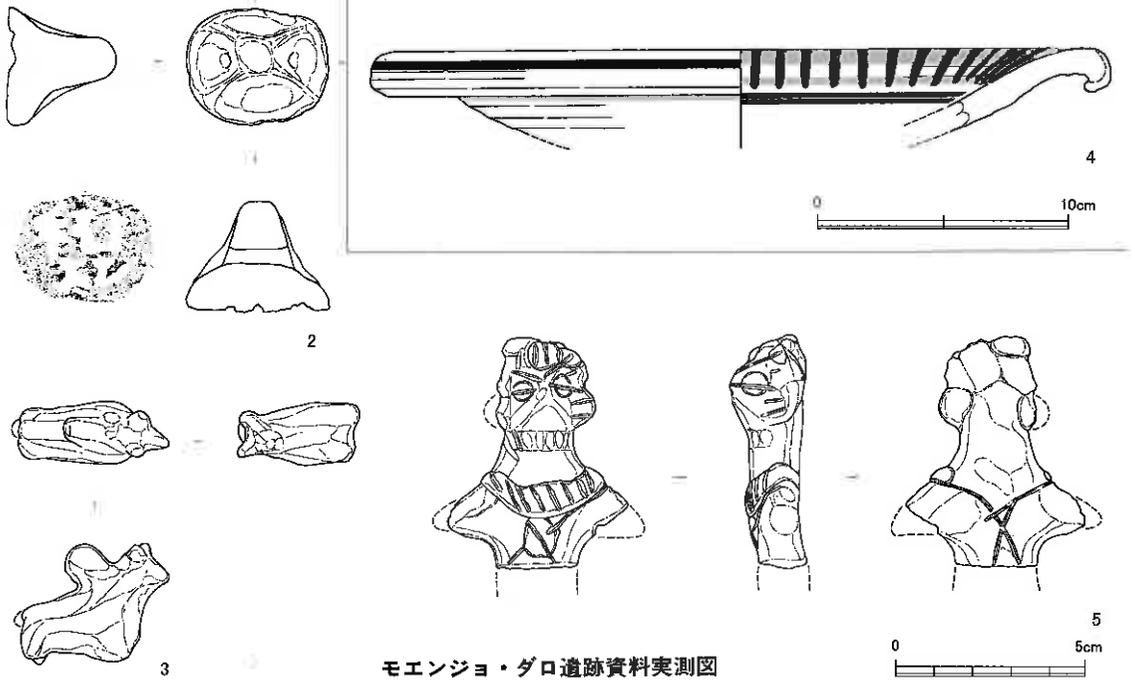
些少な資料であるが、本遺品が南アジア考古学への理解の一助となれば望外の幸せである。ただし、購入品、採集品ともに、本来の脈絡から遊離したものであり、層位・型式ともにインダス文明期のものとは断定し得ない。なお、遺物実測・写真撮影と観察は、上杉彰紀（関西大学大学院）が行なった。

## インダス印章シーリング複製品

カラチ国立博物館に収蔵されている凍石製方形印章のシーリング複製品である。石膏に陰刻の印章原体を押し付け、文様を陽刻状に図像・文字を押し出す。コブウシ・無コブのウシ・サイ・ゾウなどの動物や神像などの図像とインダス文字を刻み、いずれもインダス印章としては典型的な例である。インダス文字の解読はいまだなされていないが、インダス文明期における都市社会の構造を知る上で大きな意義をもつものである。



写真1



モエンジョ・ダロ遺跡資料実測図

### 有銘印章

土製で、灰色から灰褐色を呈し、硬く焼きしまる。水平方向に紐孔をもつまみがついており、紐を通して懸垂することを意図したものと考えられる。つまみは四方向から指オサエによって緩やかにぼみがつくられている。銘文面は楕円形を呈し、平坦面を構成する。4個の文字を2文字2段にヘラ状工具によって刻む。長径3.7cm、短径3.05cm、高さ3.0cmを測る。

### コブウシ形土偶

脚部・尾を部分的に欠損するが、全形がわかる例である。全長4.0cm 最大幅1.65cm 高さ3.2cmを測る。明橙色で赤褐色スリップを施し、胎土は密・精良、シャモット微粒を多少含む。

### 土器片

高杯の口縁部である。淡橙色から明橙色を呈する表面上に赤橙色スリップを内外両面に施し、さらにその上から黒色・赤色彩文を描く。体部には内外にロクロ使用によるナデ痕が観察でき、口縁部まで成形したのちに、粘土紐を擬口縁端部外面に貼り付け、下方に巻く口縁端部形態をつくっている。彩文は体部外面および口縁部外面に各1条、体部内面に4条の横位帯状文を彩文し、口縁部から体部内面にかけて1.0cm間隔ごとに並ぶ縦位の平行線文をあらわす。口径27.6cm、遺存高3.3cmを測る。胎土は密、白雲母微粒・

穀物粒微粒を多少含む。

### 人物土偶

上半身が遺存し、遺存高6.2cm、遺存幅4.7cm（両腕間）、厚さ1.4cm（首部）を測る。全体的に扁平な板状の胴部に、四角錐状に中央が隆起する顔を伴う頭部をもつ。粘土塊貼付・刻線によって頭飾もしくは頭髪、首飾2種をあらわし、胸中央に円形粘土板を貼り付け、×状刻線を施す。背面にも肩から背中中央にかけて3本の刻線を×状に施す。そのうち首の位置に表現されていた首飾をあらわす粘土紐は右端一部を除いて剝離・欠失している。上述のように、背面には刻線を施すが、装身具等の細部表現はない。色調は赤褐色から淡橙褐色を呈し、スリップは施さない。胎土は密で、白雲母微粒を多少含む。焼成は良好、硬く焼き締まる。本例は、モエンジョ・ダロ遺跡における現地住民からの購入品であるが、この土偶形式はインダス文明期のものではなく、前2～1世紀ごろのガンダーラ地方からタキシラー地方に特徴的なものである。シンド地方での報告例はなく、北西インドにおいて採集され、古物売買によって遠くモエンジョ・ダロ遺跡の売人の手にもたらされたと考えられる。

\* 辛島 昇・桑山正進・小西正捷・山崎元一 1980『インダス文明 インド文明の源流をなすもの』日本放送出版協会、東京